



福井県

中学校長会の窓

福井県中学校長会
福井県中学校長会広報部
宮田 写植 印刷
福井市春日1丁目7-4
TEL (0776)35-3865

第 146 号
令和 5 年 7 月 14 日 発行

第72回 福井県中学校長研究大会 鯖丹大会

令和5年5月11日(木)
鯖江市 嚮陽会館

会長挨拶



福井県中学校長会

会長 合川修一

(進明中学校)

立夏も過ぎて約一週間、山々の緑もその濃さを増し、初夏の訪れを感じさせる季節となりました。新型コロナウイルスの感染状況も幾分落ち着いて、その感染対策も各自の判断に委ねられる形に変化している中、この鯖江の地におきまして、県内各地より中学校長会の会員が参集の下、令和五年度第七二回福井県中学校長研究大会鯖丹大会を開催できましたこと、大変嬉しく思います。また、本研究大会には、公務御多用の中、福井県教育庁学校教育監松下晋也様、越前町長青柳良彦様をはじめ、多数の御来賓の皆様のお臨席を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、新型コロナウイルスの発生から三年余りが経ちました。五月八日からは感染法上の分類が「五類」に引き下げられました。この新型コロナウイルスに象徴されるように、今はまさに先行き不透明で予測困難な時代であることは間違いない。その変化の激しい社会を自らの手で切り拓く力を育むための「令和の日本型学校教育」は、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指すものです。そのための大きな柱として、令和三年度から完全実施となった学習指導要領を着実に実施すること、学校にお

ける働き方改革を進めること、そして教育DXを推進することの三つがあげられています。当然、私たち校長はこれら常に念頭に置きつつ、校内においては職員の特性をしっかりと把握し、適切に配置することで、職員個々の能力を最大限に引き出せるようマネジメントすることが求められます。中学校においては、年度初めに「三年生は学校の顔」であることよく言いますが、その学校の代表たる三年生をそれぞれの学校を象徴する顔に育てるのは教員たちであり、そしてそのすべての責任を負うのが我々校長です。つまり、我々校長自身も『学校の顔』であることを自覚しなければなりません。

しかしながら、学校現場には、いじめ、不登校、SNSトラブル等の生徒指導上の諸問題、LGBT等に係る人権問題、特別な支援を要する生徒への合理的配慮、教員不足、若手教員の育成、不祥事の根絶、働き方改革、そして部活動の地域移行など課題は山積みであり、悩みは尽きません。学校の経営者たる校長は、その課題一つ一つと向き合い、解決に向けて進めていかねければなりません。しかし、この多くの課題に対し、自分の学校だけで取り組むには限界があります。各市町の校長会で取り組んでいただいていることもあると思いますが、この県中学校長会におきましても、それらの情報を共有しながら、解決に向けての方向性を示していきたいと考えています。

本日の研究大会は、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本を育てる中学校教育」を研究主題に掲げ、県内の中学校長の英知を結集し、諸課題の解決に向けて顔を合わせて研鑽を深める絶好の機会となりました。先ほどは、四つの分科会に分かれて熱心な研究協議を行っていただきました。また、貴重な教育実践を御提供いただきましたこと、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

私は、新型コロナウイルス感染症による臨時休業中の令和二年度に校長職に就きました。これまでの三年間は常にコロナ対応を意識した学校経営でしたが、校長先生方はこのコロナ禍の三年間で何を学ばれたでしょうか。私は、毎年度末に発行する校誌の中で、「コロナ禍で学んだこと」として、「あらゆる情報を集め共有すること、そして一歩ずつ前に進めることが重要である」と書きました。これまで難しい判断を迫られることが何度もありましたが、その時参考になったのは集めた情報でした。多くの学校と情報を共有することで、一歩ずつではありますが、学校としてその歩みを止めずに、前に進むことができたように思います。この県中学校長会には、それぞれの学校の歩みを進めるための情報共有の機会を提供するという役割も担っていきたくと考えています。

最後になりましたが、本研究大会の開催にあたり、御指導と御支援を賜りました鯖江市、越前町の各市町当局をはじめ、福井県教育委員会ならびに鯖丹地区の各市町教育委員会に対しまして、深く感謝申し上げますとともに、開催準備や運営に御尽力いただきました鯖丹地区の校長先生方に心から御礼を申し上げます。御挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

役員名 列

令和5年度 福井県中学校長会	会長	(進明)	合川 修一
	副会長	(織田)	林 明宏
	副会長	(松陵)	金井 光広
	会計監査	(坂井)	林田 俊治
	会計監査	(武生第)	田倉 富栄
	理事(福井)	(進明)	合川 修一
	理事	(明道)	新道 正芳
	理事	(大東)	永廣 裕子
	理事	(上志比)	佐藤 成司
	理事(坂井)	(金津)	荒川 誠
	理事	(丸岡南)	黒川 光憲
	理事(奥越)	(尚徳)	土蔵 清治
	理事	(勝山北)	齋藤 治
	理事(鯖丹)	(中央)	五十嵐靖浩
	理事(南越)	(織田)	林 明宏
	理事	(武生第)	川崎 正人
	理事	(池田)	森岡 裕一
	理事	(南越前)	今村 憲和
	理事(二州)	(松陵)	金井 光広
	理事(若狭)	(三方)	今川 直
	理事	(上中)	津田 雅幸
	理事(中教研)	(大飯)	時岡 聡
	理事(中体連)	(藤島)	片岡 祐治
	理事(教育研究)	(成和)	安本 桂樹
	理事(人権政策)	(社)	鈴木三千弥
	理事(進路対策)	(明倫)	竹澤 宏保
	理事(広報)	(美山)	竹野 亨
	理事(学力診断)	(川西)	田中 典子
	理事(庶務)	(至民)	秦 計代
	理事(庶務)	(光陽)	水野 克己
	庶務幹事(会計)	(灯明寺)	野路 佳男
	事務局長		五十嵐隆美
	事務局員		小林 利幸

福井県教育委員会
学校教育監

松下晋也氏



皆さま、こんにちは。本日、令和五年度福井県中学校長研究会をここ鯖江市嚮陽会館で開催されることを心からお祝い申し上げます。

校長先生方には、日頃生徒の学力向上、いじめ等の問題行動、不登校対策など多くの課題に対し、日々御尽力されていることに対して感謝申し上げます。先ほどもありましたが五月八日には、コロナが二類から五類に移行となりました。これからはコロナ以前の日常が戻ってくると思います。学校行事をはじめとする全てのことに前例踏襲で

はなく、常に改善できることがないか思いを巡らせていただきたいと思います。

ご存じのことと思いますが、校長の職務規程について学校教育法で「校長は校務をつかさどり、所属職員を監督する」と定められております。学校で決裁権をもつのは校長ただ一人です。最終判断は校長が行い、その職責は大変重いものがあります。もちろん、ワンマンになつてはいけません。職責の重さを心にとどめて学校経営にあたってくださいますよう、お願い申し上げます。

また、所属校において、不祥事や交通事故、交通違反を起こさないように指導をしていただくことはもちろんですが、万一、いじめ問題や不祥事等が発生した場合には、的確な初期対応をするよう、また、組織として対応するように校長先生が陣頭に立つようにしてください。また、早い段階で必ず市教委に一報入れるようお願いいたします。

四月に県立学校において横領事案があり、免職処分等懲戒処分が行われました。金銭管理については、特に適正に実施するようお願いいたします。

四月の終わりに文部科学省から教員勤務の実態調査の速報値が発表されました。本県でも独自に勤務実態の調査を行っていますが、時間外勤務が八〇時間を超えている教職員はなかなか

ゼロになりません。教職員の健康を守るため、働きやすい職場にするため、ぜひとも働き方改革を進めてください。超過勤務をなくすことは、教職の魅力向上につながります。教職員にとつて働きやすい職場環境になることは、教員志願者が増えることにもつながると思います。今までの当たり前を疑い、できるところから働き方改革に向けての改善をしてください。また、最近では男性育児休業のことも言われています。男性教職員が少しでも育児休業を取得できるよう、校長先生がぜひ御配慮をお願いしたいと思います。

現在、福井県だけではなく、全国の高等学校で普通科系も、職業系も、探究や課題研究を重視しています。私が経験した高校では、一つは地域の課題や政治経済などをテーマにして生徒は探究活動を行っていました。もう一つの学校では、SSH指定校ということもあり、アカデミックリサーチ、いつてみれば大学の卒業論文のもう少し簡易版というイメージをしていただければいいかと思いますが、そのような研究活動を行ってほしい。両校とも生徒が自主的に探究活動を行っていき、それを教員がしっかりとサポートしています。生徒は探究活動を熱心に行うことにより学びの質が向上します。また、自分のやりたいことが明確になっていきま

す。そして高校では探究活動を通していわゆる推薦入試で自分の進みたい大学への道を開いていった生徒も多くいます。

例えば大阪大学は、高校時代に探究活動を熱心に行い、推薦で入学した学生が大学に適應しているという非常に高い評価をしています。中学校でも探究活動や課題研究に取り組んでいると思いますが、さらに進化させていきたいと思いますよう、お願いいたします。

また、普通科系高校では、以前は一日七時間週三五時間を超える課程を行っていましたが、現在は、そうではなくて、例えば、週三二時間にするなど、生徒に時間を返すようにしています。宿題についても以前のように大量に出すことはせず、精選して生徒に出すようにしています。そのような取組を行うことで、生徒に時間を返し、生徒が自主的に学習をする、あるいは、自分のやりたいことをできる時間があるようにしています。教員は徹底的に教え込んだり指導したりすることをやめ、生徒の主体性を育てるようになっており、教員がサポートする体制をとっています。

生徒会活動や学校祭、体育大会、部活動など、高校では生徒主体で活動する場面が多くあります。高校では指導から支援へ、生徒が主語になる教育を目指しています。中学校においても、生徒

の自主性を育てる取組を行っていると思いますが、中学校と高校の接続をスムーズに行うという観点から、中学校段階で基礎学力を定着させていただくことはもちろんですが、これまで以上に主体的に活動できる生徒を育成することを心がけていただきたいと考えています。そうすることで、中学校と高校の接続、連携がうまくいくだけでなく、さらに大学や社会で活躍できる人材の育成につながると思います。

最後に、県の施策について、簡単に説明したいと思います。県としては、「引き出す教育」「楽しむ教育」を推進していくため、子供俳句コンクール、ふくい理数グランプリ、地域の魅力を伝えるプレゼンテーション大会、ふるさと福井CMコンテストを開催いたします。生徒が積極的に参加するよう御協力をお願いいたします。

最後になりますが、福井県中学校長研究会のますますの御発展とここに参加されている皆さまのますますの御活躍を祈念して、開会のあいさついたします。



分科会報告

■第一分科会

カリキュラム・マネジメントの推進

地域活性化プロジェクトを基盤とした教育課程の編成

発表者 東浦中 山岸 美穂

◎発表要旨

「東浦地域活性化プロジェクト」
①「東浦みかんプロジェクト」で地域を活性化させる

昭和四十六年頃から始まった観光みかん農園で、本校はこれまで摘果や収穫などに参加してきた。

平成二十六年年度の「教育フェア二〇一四敦賀」での発表を機に、東浦みかんの調べ学習が始まり、実現可能な案を自分たちで考え、提案させることとした。○地域住民への提案、○実現可能な提案、○データを基にした提案、○成功した取組を参考に提示し、各学年が分担して調査と分析を始めた。生徒たちは、東浦みかんの六次産業化という方向性にたどり着き、様々なアイデアを提案した。

平成二十七年年度、地域の産業を受け継ぎ、みかん栽培に主体的に携わっていく子供たちを育てることを目的に、小中一貫で学べる「東浦みかんプロジェクト」がスタートした。この取組が活発に行われて以降、校区に新たに有志によるみかん生産組合が発足し、みかん六〇〇本を植えて、みかん栽培にとりかかっている。

子供たちにも「課題」が生まれ、みかんを商品として大切に取扱い、より良い状態で出荷しようという意識が高まってきた。

PR活動にも取り組み、お客さんの反応に直接触れることで、子供たちは東浦みかんの価値と地元への誇りや自信を抱くようになっていった。

コロナ禍では、東京大学みかん愛好会とリモートで交流し、みかん生産の全国的な動向や課題、消費量を増やすための様々な方策等について、意見交換している。これらの取組は、地域の関係者からも、評価を得てきた。

課題は、中学生による活性化策の提案が、近年滞ってきたことである。地域の過疎化の問題も含め、校区全体のまちづくり活動に学校としてどのように関わっていくかを考えていかなければならない。

②「伝統継承プロジェクト」で地域に貢献する

校区の利根八幡神社に鎌倉時代から伝承され、県民族無形文化財に指定されている「阿曾相撲甚句」が、人口減少に伴い存続の危機に瀕していた。そこで、本校の児童生徒全員が関わり、歴史を学び、参加することにより、地域に伝わる伝統芸能の意義を理解し、継承しようとする気持ちの育成につながっている。

③「海岸清掃プロジェクト」で地域に奉仕する

生徒会の提案により、毎年夏に校区の海水浴場の清掃活動を行っている。海岸線をきれいにし、観光客に気持ちよく海水浴をしてもらおうというおもてなしの心だけでなく、環境問題を考える取組に発展する可能性をも秘めていると捉えている。

④「小規模特認校制度」の展開

令和二年度より、小規模特認校制度を導入し、市内全域から児童生徒を受け入れていた。前述の三つのカリキュラム以外に、○学力の保証、○地域と協働開催する「ふれあいフェスタ」、○全校児童生徒を前にした「東浦つ子タイム」の表現活動に取り組んでいる。

少人数ならではの環境の中で、個を活かし、地域と密接に関わりながら教育活動を展開する本校には、他校にはない素晴らしい実践がたくさんある。小規模特認校制度を掲げる本校として、特色あるカリキュラムを推進し、地域との連携を大切にしながら、「チーム学校」として、より豊かに子供たちを育てていける学校づくりへの挑戦をこれからも続けていく。

◎研究協議

〈グループ協議の柱〉

○教科横断的なカリキュラム・マネジメントをどのように編成・実施しているか

○資質・能力を育成していく教育課程の編成・実施をどう評価しているか

・小中が連携し、九年間を貫くカリキュラムならではの実践である。地域に優れた探究材があるのが素晴らしいし、地域の文化が人を育てる。ストーリー、スパイラル、スクールカルチャー、この三つが揃った東浦中の実践がとても楽しそうだと感じた。各教科との関わりがあり、人の介在、人との関わりが、キャリア教育ともつながる。また、行政ともつながるなど、いろいろなおもしろいところやつながりながら、ふるさと学習を進めていくことが大切である。

・評価については、探究プロセスの中で、子供たちが迷う場面を大切にしたい。迷わないと作業で終わらせてしまうことになる。迷いをステップとして進んでいけるよう、伴走型の支援をしたい。

・課題として、先生が評価できる資質・能力もあれば、関わってくださる大人や仲間同士で評価し合う部分もある。私たちには、これらをきちんと整理・整頓しておくことが求められている。

・様々な活動をつなげていくことで、新たな課題が見つかる。活動を重ねる中で教科横断的なカリキュラム・マネジメントの展開もある。

・地域活性化においては、行政や団体の方と生徒とが直接話し合う場を設定することにより、生徒に当事者意識を芽生えさせることができる。

・評価については、どんな資質・能力をつけさせたいのかということ踏まえ、このことを生徒と共有していくことが大切である。

・総合的な学習の時間における探究活動が探究のレベルに至らず、活動で終わってしまっているという反省に立ち、どんな資質・能力を身につけさせたいのかを議論し、意識した上で取組を展開する。記録を残していくことを重視し、そこから次の見通しをもつようにより、カリキュラムを作っていくことが大切である。

・生徒が疑問をもつことをよしとしない風潮、教員の言うとおりにすることをよしとする風潮があることが問題。自分の問いを生徒がもつようにしていくことを教員全体

で共有していくことが必要ではないか。

・キャリア教育については、地域の特色を取り入れ、発信のアイデアを生徒たちが決めるなど、子供の実態に応じてカリキュラムを変え、子供が地域に誇りをもてるようになっている。

・地域からの要請が多く、学校の探究活動と必ずしも合致していない現状がある。

・評価は、生徒が探究したいテーマをもっていることが重要で、テーマに対してその子がどんなプロセスを踏んで活動に至ったのかを大切に。活動が重要なのではなく、活動に至っている子供の頭の中を教員が推測することが重要。これまででは、子供が教員の考えていることを模索しようとしていた。子供の考えを想像し、教員間で議論していくことを大切にしたい。

(角鹿中 岩崎俊文)



■第二分科会

よりよく生きようとする
意思や能力を育む
道徳教育の充実

「自分らしき」をキーワードに

発表者 名田庄中 赤井孝行

◎発表要旨

本校の生徒は礼儀正しく、清掃などにもまじめに取り組むことができる。一方で、少数数の固定化された人間関係であるためか、自分らしく立ち振る舞うことに躊躇してしまう傾向も見られる。

生徒が友達との関係性を大切にしつつ、今以上によりよく生きようとする意思や能力を育むには、自分らしさに気づくことや集団が自分らしさを受け入れてくれる安心感が必要である。

そこで、自分らしきの育成を道徳の時間だけでなく、教育活動全般で取り組んでいけるように、学校教育目標を「未来を自分らしく生きる生徒の育成」とし、生徒が自分や友達との長所に気づき、お互いに認め合う取組をスクールプランに位置づけ教育活動を実践した。

取組を評価するために、学期や行事ごとに、「自分らしきアンケート」を生徒と教師に実施した。また、ゆとりある研究時間の確保のために、日課表の見直しなど、業務改善にも取り組ん

だ。

①自分らしきカンファレンス

授業における「自分らしさを活かす場面」の実践について、教師同士で交流し合う機会を定期的に設けた。各学期の実践を振り返りながら、交流で得られた学びにより、次学期の展望をもつことができた。

②特別の教科道徳

後期指導主事訪問日に三年生で行う道徳の授業（主題名「自分らしい生き方」、教材名「ひび割れ壺」、内容項目「個性の伸長」）を、一・二年生でも行った。授業では、生徒から、「短所は悪いことではなく、自分らしさである」などの意見が出され、ありのままの自分を認めていこうとする態度の育成につながったと考える。また、授業の後には生徒の学びを職員室で語り合う担任の姿があり、自発的に授業を振り返り、自らの実践につなげようとする様子が見られた。

③全校集会で自分らしき（全校道徳）

各学期に実施している「自分らしきアンケート」の結果を活用し、全校集会の機会に全校道徳を行った。

一学期の始業式では、学校教育目標の浸透を図るため、AIの話を例に挙げ、自分らしく生きることの大切さについて考えた。

五月の全校朝礼では、生徒が考える「自分らしき」と「自分らしきの具体例」を示しながら、

それらの意味について考えた。

二学期の始業式では、「自分らしく二学期を生活する」というテーマで、学校生活の大半を占める授業中の学びについて考えた。「分かります」という発言を、学びをもう一度考え直すよい機会と捉え、授業中の間違いや「分かりません」という発言の大切さについて考えた。

また、各学期の終業式には、「自分らしきアンケート」の結果をもとに、振り返りを行う場を設けた。

④学校行事で自分らしき発見

体育祭や学校祭では、自分らしさが発揮でき、友達のその人らしさが見える活動と評価になるよう工夫をし、多くの生徒が自他の自分らしさに気づくことができた。

修学旅行では制作活動を通して、自他の自分らしさに気づくことができた。また、校外学習の企業訪問では、自分らしく生きる将来について考える機会となった。

⑤成果と課題

学校評価や「自分らしきアンケート」の結果から、自分らしさを大切にしたり、自他の自分らしさを伝え合ったりできる生徒や、一年前と比べて自分らしく生きようとしている生徒の割合が増えてきたことが分かる。

また、生徒の個性を尊重し、長所を認める積極的なコミュニケーションを行っている教師の

割合、自分の子供が教師から認められたり、褒められたりしていると感じている保護者の割合も増え、一定の成果が見られた。

これまでは生徒個々の自分らしさを育むことが中心であったが、今後は、すべての生徒が認められ、受け入れられる仲間づくりの研究を深めていきたい。

◎研究協議

【協議の柱】

(1) 生徒の自己肯定感を高める取組をどのように仕掛けるか
(2) 個性をお互いに認め合える集団をどのような仕掛けでつ

くっていくか
・小規模校では、固定化された集団の中で、自己開示の体験が少ないため、教育活動の中でその機会を設け、「もつとできる自分」に気づかせるようにしている。

・自分たちの意見が反映されたり、自分たちが企画・参画して活動を成功させたりする体験を生徒にさせると、自己肯定感の向上につながるため、そのような機会を多く設けていく必要がある。

・校長としてスクールプランの中にポジティブ教育をしっかり位置づけ、教育活動全体を通して自己肯定感を高めていくことを、全職員が意識するようにしている。

・認め合える集団づくりのための取組として、小グループの中で

一人が話をし、それに対して、うなずく、拍手をするなど良いリアクションを返す活動を朝の会でやっている。繰り返すことで、受容的な態度が身につけてきて、学校全体の雰囲気も良くなってきた。

・生徒の自己肯定感を高めるために、校則の改正など、様々な活動に生徒主体で取り組ませ、成功体験や周囲から認められるような体験を多く積ませている。

・自分の個性や考えをアウトプットし、それが周囲に受け入れられると自己肯定感の向上につながるため、互いに認め合える集団づくりが大変重要である。

(大飯中 時岡 聡)



■第三分科会

社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実

「つながりを大切に、
未来を切り拓く生徒を育む」

発表者 大東中 永廣 裕子

◎発表要旨

福井市足羽第一中学校(本校)では、令和四年度の福井市学校教育方針「学びをつなぐ・未来につなげる」をつながるを大切にしながら「学びをつなぐ」に基づき、分かる授業づくりとキャリア教育の充実を重点項目として設定し、互いに関連付けながら「自ら課題をもち力強く歩んでいく生徒」「将来一人一人が社会の中で夢や希望をもち、自分らしくたくましく生きていく生徒」をめざし実践に取り組んだ。

①本校の特色と課題からキャリア教育を学び直す。

・学校評価の結果から伺える現状と課題

生徒は素直で物事に真面目に取り組むが、周りを気にしすぎたり失敗を恐れたりして、新しいことにチャレンジすることを躊躇する傾向がある。また、学校評価においては「将来の夢や目標をもっている」「地域や社会のために何をすべきか考えたことがある」等の項目において、他の質問項目に比べて低い数値を示していた。

・課題解決に向けた組織的対応の必要性
・スクールプランへの明示

「授業改善」「人間力育成」「キャリア教育」の三つの柱を明記し、キャリア教育において育む四つの基礎的・汎用的能力を、本校の目指す生徒像とつなげ教育活動全体で育成することを示した。

・キャリア教育の意義を理解し実践する

教職員がキャリア教育について学び直す場を設定し、生徒のキャリア発達を促すためにどのような力をつけていくべきか、各教科や学級・学年の活動でどのような取組ができるかを話し合った。また、研究主任・特別活動主任・総合的な学習の時間担当等がキャリア教育担当者と連携しながら地域活動や学校行事を計画実践するしくみをつくった。

それぞれの教育活動を通して、今学んでいることが将来とどのように結びついているのかを、教職員も生徒も共に意識して学べるように工夫した。

②具体的な取組

・「付きたい力」を意識できるように授業の工夫

社会科の実践を例に挙げると、選択し判断できる課題や問いを設定する。また、ペアや班での話し合い活動、課題を整理していく場と時間、学んだことを振り返り文章として表す場を設定する。単元終了後は、これからの生き方とつながる視点について、考えを記述する。これらの学びを通して自分たちの未来を創造しようとする意識を高めることができた。

・語り合うことで人間形成力を育成するために、「語る会(ラウンド

テーブル)」の実施

「学年目標づくり」実践例

自己の役割を理解し他者に働きかけるコミュニケーションスキル、チームをまとめるリーダーシップを育成することができた。

「新入生と語る会」実践例

次年度入学生を対象に生徒企画で中学校生活を説明、校舎案内の後小学校ごとに集まり「新入生と語る会」を実施した。コーディネーターとしての力をつけるとともに、先輩としての意識を高め、六年生に夢と希望を与える目標を達成することができた。

「明日の一中を語る会」実践例

進学・進級直前の時期に、不安を取り明る気持ちで新年度を迎えることを目的に、この一年で成長できたことや頑張ったことについて語り合った。自己表現力や仲間への考えを理解する力を育めた。

・地域や企業との「あつたかつながり」を育む

「職場体験学習・職場見学」実践例

事前学習を行ったうえで、職場体験学習を行った。各職場での出会いやふれあいを通して、社会人のマナーやルールを学ぶことができた。また、体験学習後には学んだことをタブレットや報告書にまとめ、一、二年生の交流会をもち、分かりやすく伝える工夫を試みながら発表した。

「母校訪問駅伝大会」実践例

半世紀以上にわたって開催されている地域の伝統的行事にもなっている母校訪問駅伝大会については、地域との心の交流やつながりを見えるようにした。大会の準備

や参加を通じて、生徒は「目標に向かって努力を継続する力」のみならず「多くの方の支えに感謝し応えようとする力」や「地域愛」「学校愛」などが育まれた。

③成果と展望

将来どのような大人になってもらいたいのか、そのために我々は生徒にどのような力を付けたいか、について教職員同士が共有しながら教育活動を展開することができた。

・学校評価において、懸案であった評価項目の数値に改善が見られた。

・今後、足羽一中校区では「一中校区分ランドデザイン」を作成し、キャリア教育の視点を重視した授業改善を進めていく。

◎研究協議

・キャリア教育を行う上で、総合的な学習の時間はその中心となりがちだが、教科での学びと連携させ、教科等横断的なカリキュラムを推進していきたい。

・探究学習は高校や小学校でも盛んだが、中学校においても今回の事例にあつたように地域の人とやり取りする中でコミュニケーション力を伸ばすことができる。自校においても進めていきたい。

・縦割り活動を充実させることで、幅広いつながりを作ることができ。一町一校の地域では町教委の指導もあり、九年間以上のつながりをもちながら地域とのつながりを深めることができています。発表事例にあつたように、職場体験学習後に経験をまとめ、学年を

超えて相互発表する取組が素晴らしいと感じた。また職場体験学習では、コロナの時期に体験可能企業等との関係が弱くなる傾向があつたが、PTAが仲立ちとなつて地域の企業が積極的に応じてくれている。

・新入生と語る会の取組は自校でも実践してみたい。また年度末に生徒が、この一年で学んだことや成長したことを振り返り、下級生に語る実践も素晴らしいと思つた。

(安居中 野坂訓由)



■第四分科会

自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実

発表者 三國中 西 健

◎発表要旨

前任校の坂井市立坂井中学校での二年間にわたる実践である。

- ① 好ましい人間関係を築き、他者と協働した活動の充実
- ・生徒心得の見直し

令和三年度に全国的に校則改正の気運が高まった。本校においても、年度当初、生徒会執行部から生徒心得見直しの要望が出された。教員は生徒の主体性や自治活動を後押しするため、出された要望をもとに生徒が考えたり話し合ったりする機会をできるだけだけ設けようと考えた。

令和三年度から二年間の生徒心得の見直しにより、生徒会執行部や代議員、学級において積極的に意見交換をすることができ、生徒が校則について自分事として捉えるようになり、自分たちが決めたルールを守ろうとする姿が見られるようになった。

・ポジティブ教育

本校区の小学校は単学級の学校が多く、幼い頃から仲間と安

心して学校生活を送ることができるとい。その反面、固定化された人間関係の中で思い通りの自己表現ができないためか、本校に入学後、不登校になる事例が多かった。そのため、令和二年度より校区の小中連携の取組として、ポジティブ教育を始めた。

これにより、行事等におけるピア・サポート活動が充実し、自己肯定感や自己有用感を高めることやレジリエンス教育の実践によりくじけない強い心や気持ちの切り替えができるしなやかな心を育てている。

・地域や社会の人々と協働した活動

地域に関心をもち積極的に関わろうとする生徒を育てるために、二・三年生において「坂井町魅力発掘・探究」というテーマで、地域を深く掘り下げ、地域住民と連携・協働した活動や発信を行うこととした。

令和四年度は、住んでいる地域により関心をもち、その良さや課題を考える活動を行った。生徒は小グループに分かれ、自然、伝統、産業、イベント等をテーマに探究活動を行った。今年度は、地域の課題を改善するための方策や町おこし策を市当局に提案する活動を行う。

② 新規不登校生徒を抑制するための「魅力ある学校づくり」の取組

坂井市では、生徒にとって「魅

力ある学校づくり」を進めることにより、不登校の「未然防止」、特に新規不登校生徒数の抑制を目指している。

学期の終わりに生徒の意識調査を行うとともに、県質問紙調査や本校独自のアンケート結果も含めて、教員は生徒の変容や教員の取組を分析し、次学期の強化策を考えた。このようにPDC Aサイクルを回す中で、教育実践を見直している。

令和四年度は、校内の研究推進委員会等で協議を行い、研究テーマである「言語活動の活性化」を「魅力ある学校づくり」と連動させて焦点化を図ることにした。この取組に加えて、悩み調査、相談室の活用、SCやSSWの活用、特別支援コーディネーターの活用、相談機関や特別支援等の関係機関との連携をさらに深めたことで、令和四年度の新規不登校生徒が抑制された。

◎研究協議

① 他者と協働した活動を、校長としてどのように創っているか

・もともと不登校生徒が多く、コロナの影響もあって積極的に話をしない生徒が多く見られたので、授業中の対話を引き出すための手立てとして授業時間を工夫し、生み出した時間でレクリエーションや生徒会活動を行うことで、生徒

の主体的な活動を引き出すことができた。

・生徒心得の見直しについて、若い先生と生徒たちは一生懸命やっているのだが、校長として様々な取組の見直しをもたせることを提示することが大切である。

・校則改正の話し合い活動の場で、外部機関の協力を得て、他校の取組を紹介してもらい、自分たちの学校を盛り上げることができた。

② 不登校生徒を少なくするために組織としてどのように取り組んでいるか

・校則改正を話し合いに据えることで、生徒の集団への参画意識や学校への愛着が増した。また、年度が変わっても、話し合い活動を継続させることが重要である。

・校則を話し合うことで先生に認めてもらったという安心感が生まれ、先生とのつながりが強くなった。

・校則が緩くなっても、対話型の授業になったため、生徒の活動量が多く、多様な意見が出るので結果的に効果があったと言える。

・授業をよくしていくことよりも、生徒と教員の関係をよくすることに視点を置いた。当たり前を褒め、当たり前に感謝するという即時評価を大切にすることで魅力ある学校に近づけることができた。

・教育総合研究所が実施しているピア・サポートプログラムやレジリエンス教育などの福井県版ポジティブ教育プログラムを活用することで、学校がかなりよくなった。

(坂井中 林田俊治)



中学教育に

清風

新入会員だより

ナンキンハゼの木に

思いを寄せて

明倫中学校長 竹澤 宏保



開校記念式では校長が学校の歴史について語ることも多い。ネタ探しのつもりで本校の五十周年誌をめくると、ある校長の手記に大変興味深いエピソードを見つけ、是非中学生に紹介したいと思った。そのエピソードとは、開校間もない昭和二十七年冬、視察で本校を訪れた愛知県のある中学校長が、殺風景な校庭を見て、自校に繁るナンキンハゼの種子を、手紙とともに送ってくれたという。その激励の手紙の中には自作の詩が添えられていた。

『祈り』(…略)：

私はふと樹木のない学校の夏を想像してみたら、樹木に包まれた校舎の上には湧く夏雲の下に、雪国の少年が大陸を想像し、大洋を夢見て。

「日本の将来を考えてほしい」

私は明倫中学校の少年に、大木ナンキンハゼの種を贈って、その大志を祈りたい

ナンキンハゼの木々は今も校門横

に茂っている。種子を送ってくくださった校長先生のお気持ちは、現在にも通ずる。保護者や地域の方々、そして教職員の間にもある。そんな心温まるエピソードにふれることができるのも、学校の幸せの一つと噛み締めている。

笑顔いっぱい为学校に

棗小中学校長 藤木 洋子



学校の目の前にある朝倉山の緑が美しく、子供たちを迎える朝にぼんやりと眺めていると、元氣な「おはようございませう」の声。思わず笑顔がこぼれます。今年度のテーマを「NSY」なつめスマイルイヤーとして、スタートさせました。小中九年生が共に過ごす学校には、たくさん笑顔があふれています。職員室からも笑い声が聞こえてきて、校長室にいても笑えちゃいます。

そんな中、「子供が本気になる授業づくり」を研究テーマに掲げ、真剣に話し合う教職員を頼もしく感じます。地域から大切にされている学校です。これから地域貢献できる子供たちの育成に努め、棗地区全体に笑顔が広がるような取組をしていきたいと考えています。

地域や人とのつながりを大切に学校をめざして

鷹巣小中学校長 木本 茂



鷹巣地区は海と山に囲まれた自然と歴史に恵まれた地域です。特に爽やかな海風がふく五月、校舎から見える日本海の青海原や緑の山々は絶景です。この

ような美しい地域の学校に、小学生四名、中学生も同数の四三名が生活しています。

四月十八日には、糸崎地区の伝統行事で、国の重要無形民族文化財にも指定されている「仏舞」に、児童数名が出演し、中学生がその様子を参観しました。子供たちには、伝統や歴史のあるこの鷹巣地区で、地域の良さを実感して育ってほしいと願っています。

鷹巣小中学校は、小学生と中学生が同じ敷地内で生活しています。年上の子が年下の子の良き手本となっており、お世話をする姿が随所に見られます。年下の子も年上の子に助けられることで、憧れや感謝の気持ちをもって生活しています。この姿こそ本校の強みであり、これまで脈々と受け継がれてきた学校文化だと感じます。この文化を大切に、一人一人が温かい人間関係の中で、笑顔で生活できるよう学校教育を進めて参ります。

誇りに思う母校づくり

胡蝶蘭に寄せて

森田中学校長 高間 祐治



四月三日、今までお世話になってきた諸先輩から、お祝いの胡蝶蘭が幾つも届きました。その思いに深く感謝するとともに、期待に応えられるよう再度、襟を正す思いでした。

届いた胡蝶蘭の中に「河野小平平成五年度・河野中平成八年度卒業生一同」という送り主の物がありました。私が新採用で赴任し、小中共に担任をして卒業させた生徒たち(今は四三歳)からのお祝いの贈り物でした。子供と共に野山や海で体験活動、体当たりの授業。それぞれのシーンは今

もはつきりと思い出せます。私の思いと同様の深い思いが教えた子たちにも刻まれていたかと思うと、教師冥利につきます。一人前の料理人になっていく者、南越前町の水害復興の要となった建設業の社長になっていく者、私も教え子の成長を見守っていますが、教えるも恩師の成長に注目していることを知り、あらためて学校の果たす役割や、生み出す絆の美しさを大切に、伝えていきたいと思いました。

地域の信頼に

忘れる学校を

足羽第一中学校長 岸上 尚毅



本校は福井市の南東部に位置し、北は足羽川、南西には文珠山を仰ぎ、四方を田園に囲まれた自然豊かな環境の中にある学校です。校区が広いため、生徒全員が自転車通学です。

令和五年度は一〇九人の新入生を迎え、全校生徒三二七人でスタートしました。校区には六小学校、公民館があり、地域と連携し積極的に地域活動に生徒たちが参加しており、地域と共に教育活動を行っています。また、歴史と伝統ある母校訪問校下一周駅伝大会は、今年で五八回目を迎え、今や地域の一大イベントとして定着しています。「未来を切り拓く生徒の育成」を学

生徒の問いから生まれる学校経営のヒント

社中学校長 鈴木三千弥



社中学校へ着任し二週間余りが経過したある日の放課後、放送部の生徒に次のような質問をされました。「社中学校の制服は、なぜこのような色と形なのですか。」

私はその問いにすぐに答えることができません。調べるから少し時間が欲しいと伝えました。校長室の戸棚にあった「開校十周年記念誌」の中にその答えは見つかりました。「新しい校舎にふさわしく新しい感覚のものを」「社会の一員としての自覚と自立心を育てるため、社会人に近い服装を」という考えからスーツ型制服が採用されたとのことです。数日後、校長室で放送部の生徒たちにそのことを伝えると、驚きと納得の声を上げていました。

「社会の一員として……」この言葉は、まさに私が考えるキャリア教育を軸とし、夢や目標をもった生徒が通う学校づくりを的確に表しています。福井市内唯一の制服に身を包んだ生徒、主

体的に活動する教職員、あたたかい保護者・地域の方々を合わせ、学校経営に取り組み覚悟です。

社会参画型学力の育成

越廼中学校長 見崎洋之



本校の旗印は、「つながりあって育つ学校・社会参画型学力の育成」です。多様な

他者と協働し、個性を発揮しながら社会で活躍できる人を育てるために、特色ある教育活動を進めております。

本校は、素晴らしい自然に恵まれ、保護者や地域の方々が協力的で、まさに地域とともにある学校といえます。公民館や自治会と協働で行う「さかなまつり」・「出店」・越廼小と合同で行う海岸清掃・シーグラスづくりなど、交流や体験を通して豊かな学びを育んでいきます。また、地域からの支援を受けて実施されるオーストラリアへの修学旅行につきましては、再開へ向けて、関係の方々との打合せの段階に入っております。

本校は、全校生徒六名という小規模校ではありますが、「教職員全員が、すべての生徒に関わっていく」という理想の姿が実現できるところです。今後は、学校間の生徒交流や他校の先生をお招きしての現職教育なども実現したいと考えておりますので、皆様方のお力添えのほど、よろしく願っています。

校訓を活かした学校づくり

宮崎中学校長 鳥居良行



四季折々の草花が咲き誇り、春はうぐいすのさえずりが生徒を

そんな美しい自然の中に本校は位置しています。また、日本六古窯のひとつ「越前焼」の産地であり、伝統の技が脈々と受け継がれている文化の香りの高い学校です。

生徒玄関前の美しい石碑には、「みずから求めて進みそして」

自分の最善をつくす」と

という本校の校訓が彫られています。全校生徒、全教職員がこの校訓を大変重んじています。入学式や新任式では、生徒代表がこの校訓を紹介し、日々目標として学校生活を送っていることを伝えていました。また、この校訓碑をいつもきれいに磨くボランティアの生徒がいます。

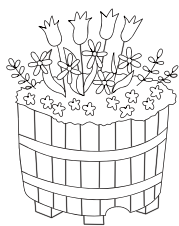
私は校長として、校訓を活かした学校づくりに取り組んでまいります。そして、生徒が生き生きと活動に取り組む、保護者から信頼され、地域に愛される学校になるよう最善をつくす所存であります。

家庭・地域とともに

武生第五中学校長 大橋周一郎



本校は越前市の西部、白山地区と呼ばれる「日本の里地里山一〇〇選」にも選ばれた自然豊かな場所に位置します。「五中坂」と呼ばれる坂道を上ると、桜が



咲き誇り、鳥のさえずりに包まれています。また、校庭には国の天然記念物であるコウノトリが雄大な姿で舞う素晴らしい環境のもと、全校生徒二八名、教職員一人一で学校生活をスタートしました。

本校の学校教育目標は「豊かな心とたくましい体をそなえ、自ら学ぶ生徒を育てる」です。昨年度の学校評価から本校の生徒は、素直でまじめな生徒が多く、与えられた課題に対して着実に取り組むことができる反面、学習に対して受け身的で、主体的に取り組もうとする生徒は少ないという結果が

出ました。そこで、本校が例年実施している「すいか栽培」では、栽培技術だけ教えるのではなく、その目的や意義について考え、どのように地域活性化につなげることができかなど、多面的な課題として捉えていきたいと考えています。

P.T.A総会に、ほとんど参加してくださる保護者の方や、すいか名人、サギ草王国の方々など、家庭や地域と協働しながら、地域の宝物を大切に育んでいきたいと考えています。

PTA総会に、ほとんど参加してくださる保護者の方や、すいか名人、サギ草王国の方々など、家庭や地域と協働しながら、地域の宝物を大切に育んでいきたいと考えています。



「学び合い」

池田中学校長 森岡裕一



「足羽の川の水」源に、四方を山にかこまれて空気が清く樹はしげる池田の里はうるわしき」本校の校歌です。この

歌詞そのままの自然豊かな環境で、心の知れた全校生徒四一人が仲良く学校生活を送っています。平成十八年から三年間勤務し、楽しい思い出がいっぱいのこの学校に、校長として赴任できたことは大変感慨深く、これからの日々を思うと胸が高鳴っています。

さて、本校は池田町教育大綱に示されている「育つ力を育てる」の基本理念の下、学校・家庭・地域が連携・協働し、子供の主体的な学びを実現すべく、地域の特色や少人数の強みを生かした教育活動を展開しています。授業では「協同的学び（少人数グループによる対話と協同による学び合い）」協働」を核として学習活動が進められ、生徒同士が教え合い学び合う関係を築いています。また、逆境に柔軟に対応できる心を育てるための「ボジティブ教育」にも力を入れています。

今後、我々教職員が一丸となつて、誰一人として取り残さない教育を目指し、教職員同士も学び合う集団として成長していく学校をつくってきたいと考えています。

「幸せ」になる、「幸せ」をつくる

気比中生のために

気比中学校長 江戸義直



創立七十六年を迎える伝統ある母校へ着任しました。本校は、「清楚」「剛健」を目指す生徒像とした学校づくりに取り組んでいます。周辺には、敦賀駅、国道八号線、駅から気比神宮へつながる商店街が立地し、まちの交通・産業の変化を直に感じ取ることができ環境にあります。今、北

陸新幹線敦賀開業に向け大きく変わる瞬間に、三五〇人の生徒が学校生活を送っています。

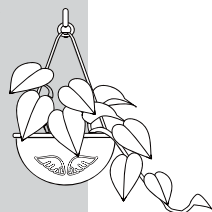
このような中、学校教育目標を「心豊かでたくましく、幸せな未来を切り拓く生徒の育成」とし、校是とともに「幸せになる、幸せをつくる学校」を合言葉に、学校経営をスタートしました。敦賀のまちと同様に大きく変化する時代、大切な意識は「ウェルビーイングな社会」であると考えています。本校生徒が、学校生活における学びや様々な人とのふれあいをとおして、「幸せ」になる、まわりの誰かを「幸せ」にする人を目指していけるよう、自ら向き合い、考え、行動できる場を、ともにつくっていきたく考えています。

一人一人の生徒が、自らの良さを生かし、力を合わせ、「幸せ」のつくり手となるよう、「チーム気比」で取り組んでいきます。

一人一人の生徒が、自らの良さを生かし、力を合わせ、「幸せ」のつくり手となるよう、「チーム気比」で取り組んでいきます。

編集後記

会員の皆様の御協力を賜り、第一四六号発行の運びとなりました。原稿執筆に御協力いただきました皆様へ、厚く御礼申し上げます。
「学習指導要領を着実に実施すること」
「働き方改革を進めること」
「教育DXを推進すること」
これらの実現のため、学び続ける校長であり続けましょ



広報部